

---

# CONDOMINIUM

RAY SMITH

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

CONDOMINIUM

### 【Nコード】

N3023C

### 【作者名】

RAY SMITH

### 【あらすじ】

11歳の夏休み、ぼくらは雑木林で奇妙なものを見つけた。ちょうど同じころ近所で子供がいなくなる事件が相次いで起こっていた。田舎から帰ってきて、友達の家に行くと、その友達もいなくなっている。いったい何が起きているのか、遊び相手もいなくなったぼくは、仕方なく友達を探すことにした……

## 1 青色のシャツ

見覚えのある“青”だった。

雨で濡れた布切れは、しわくちゃになって、腐葉土がしきつまった雑木の地面に落ちていた。大人の服ではまず見ないような、いやに鮮やかな青色。例えてみるなら、ぜんぜん効かない飲み薬の色とか。日曜日の朝方にやっている“なになに戦隊ふにやらレンジャー”のメンバーのひとりがそんな色をしていそうだった。

「なんだ祐介、それがどうかした？」  
ゆうすけ

探検に参加していた佐々木琢磨たくまが言った。

「なんか見たことあると思って」  
ぼくはつぶやく。

「誰か、近所の低学年の子が着てたような……」

「ユウマって奴のじゃないか？」

そう言ったのは北島あきらだった。やはり探検に参加していたひとりで、ぼくの友達だった。あきらはこれまた嫌に赤が目につくマンチェスター・ユナイテッドのシャツを着ている。サッカーの試合用シャツだから、当たり前といえば当たり前だったけど。

あきららは手に木の棒きれを持っていた。林に侵入したとき、入り口近くの竹林のほうで拾ったやつだ。あきららはゆっくりとした動作で棒きれのさきをシャツにつきたて、手首の力でそれを持ち上げた。

シャツには柄が入っていた。名前のない、犬のキャラクターだ。

あちこち枯れ葉のかげらだらけで、肩のところは土で変色していた。シャツの背中には、黄色みがかった白い泡がついていた。あきらがシャツを持ち上げたので、泡はぼろぼろとしなびたシャツから転げ落ちた。

琢磨が「うげえ」つとわざとらしく言いながら顔を歪めた。

「なんだこれ」

あきらも眉をひそめ、嫌悪感をあらわにした。

「カマキリの卵……じゃないよな」

カマキリは真夏に卵を産んだりはしない。量も多すぎる。カマキリの卵はたいがい乾燥していて、薄い枯れ葉色というか、茶色の綿帽子みたいなものだ。

その黄ばんだ泡は、なんとなくトイレに関係していそうだった。ぼくは気分が悪くなった。とても汚い。

あたりは冷たい空気に包まれている。虫は押し黙り、鳥はみんな死んでしまったようだった。雑木林の入り口には狭い車道があつて、その向こう、鋼鉄フェンスのさきには高速道路があつたが、林にはなんの音も届いてこなかった。ぼくらはどこかを目指して獣道をあてもなく歩いてきて、ふいに木立が開けた場所に出てきた。シャツはそこに落ちていた。

三人でしばらく、白い泡がこぼれ落ちる様子を眺めていた。

「ユウマって誰なの？」

ぼくは人差し指の爪を噛みながら、あきらに尋ねた。

「お前んちの近くに住んでる奴だよ」

あきらは顔を上げ下げしながら、あらゆる角度からきつい青色のシャツと黄ばんだ泡を観察していた。

「先週の火曜から行方不明なんだ。知らないのかよ」

その日は木曜日だった。

## 2 猫とマンホール

探検に行こうと言い出したのは、ぼくだった。

ぼくらの住む住宅地は山のなだらかな斜面に沿って広がっている。頂上付近には高速道路が通っていて、陸橋を渡ると、山の獣道に入り込むことができた。四月に引越してきたとき、お母さんがこんなことを教えてくれた。

「山に入って、ひたすらずうっと進んでいったら、浄水場があるのよ。いまはもう使われてなくて、ほっとかれてるんだけどね。もし暇なら、一回探検にでも行ってみたら？」

山には樹齢何十年と思われる杉や松の木、クヌギなどの大木がたくさん生えていた。夏休み前に学校の図書館で開いた昆虫図鑑のなかには、そういった環境でこそ昆虫たちは生きていると書いてあった。そういうわけでぼくらは探検することにした。

「この近くで死んだのかな……」

じっとシャツを見つめながら、琢磨が不吉なことを呟いた。

ぼくはなんとなくその場所を歩いた。

この近くで死んだ？

どこかに死体があるかもしれない。

前に見た映画で、ぼくらみたいな子どもたちが同じような子ども  
の死体を見つける場面があった。見つけた子は“なんで死んだんだ”  
と言って泣き出した。そんなこと考えるのは嫌だったし、死体な  
んで見つけたくないのに、頭は勝手にその映画の子みたいに話し出  
した。

「ありやなんだ？」 あきらが言った。

足下で小枝がパキッと鳴った。

あきらが指差した先には深緑の草の茂みがあった。葉っぱを触るとかぶれる草だった。茂みの根本近くに、白い毛玉みたいなものが落ちていた。

「猫が死んでるよ」

あきらは棒をもったまま近くまで歩いていった。

「なにこれ、皮だけになってる」

ぼくは一步、踏み出した。これはほんとに猫なんだろうかと思った。濡れたタオル。ぼろ布。灰色のまばらな汚れのついた毛糸のマフラ。そのどれもに似ていて、どれとも違ってみえた。

ぼくはあきらに近寄り、真正面からそれを見た。

すると確かに、その物体が体のねじれた猫に見えた。

「目がない。気持ち悪い。もう帰る」

琢磨はぼくらと猫に背中を向けた。

猫には目玉がなかった。それどころか、ぺしゃんこになった体には中身がないようだ。濡れて毛羽立った背中、平らになった頭部は上から潰されて地面に張りついているように見える。猫の潰れた鼻に、小さな黒蟻が何十匹もたかっていた。猫の額にはまた黄ばんだ白い泡がついていた。

「もういいだろ。か帰ろうよ。ご飯食べれなくなる」

琢磨はひとりで帰る勇気がなかったらしい。嫌な顔をしながら、

それでも不自然な猫の死骸を見つめている。

あきらのほうは逆に冷静で、ふーんと唸りながら猫の死因について考えているふうだった。棒を投げ捨てると、猫の近くの地面から金属の音がした。

「こんなところにマンホールがある」

あきらは指差した。

錆びた四角形のマンホール。

ぼくには、なにか意味があるように思えなかった。

玄関で靴を脱ぎ捨てると、台所まで廊下を走った。冷蔵庫を開けて顔をつつ込み、冷たい風に当たっていると、居間からお母さんがぼくを呼ぶ声がした。

ラックから麦茶の入ったプラスチック容器を出して、居間まで歩いた。ぼくは容器から直接、麦茶を飲んだ。麦茶は井戸水みたいにきんきに冷えていた。

「こら、ちゃんとコップに入れて飲みなさい」 お母さんはソファに寝転がって、テレビを見ていた。目線だけこっちに向けている。

口を拭ってから、またぼくは容器を口に持っていた。

「祐介、傘持っていたってなかったの？ はやくシャワー浴びなさいよ。風邪引くよ」

体からは熱い汗と雨のにおいがした。

麦茶を冷蔵庫に戻し、洗濯物カゴを探した。

「祐介、さつき警察の人が来てね」

「え？ なんで？」

ぼくはタオルを見つけ、それを取ったまま止まった。 お母さ

んは独り言みたいに話し出した。

「中村さんのとこの男の子がいなくなったのよ。先週は田辺さん、ほら公園のすぐ向こう側の。あそこの子もひとりいなくなってる。

それで、公園の近くに最近、灰色のワゴン車が止まってるんだって」

「その車がやばいの？」

居間に戻ると、いつの間にかお母さんは体を起こしていた。テレビではニュースをやっていた。ぼくはタオルで頭を拭いた。

「祐介は見たことある？　ワゴン車」

「ない」

「八月に入ってから公園の周りによく止まってるんだって。お隣の矢口さんは見たらしいよ」

お母さんはリモコンを手にとり、チャンネルを変えた。面白そうな番組はやってない。ドラマの再放送、シャンプーをしている女の人、宇多田ヒカル顔、ざあっという砂嵐、ドラマの再放送、ニュース、街中でインタビューを受けているおじさん、ざあっという砂嵐。「あれ、ここも映らない。テレビが壊れたよ」

「チャンネル設定変えればいいじゃん」

シャワーを浴びるために、ぼくは着替えを準備した。

「変えたんだけどね。映んない」

お母さんはまたソファに寝転がった。仕事柄、お盆でなくとも毎日お母さんは家にいる。明日からぼくらは島根の田舎に帰る予定だった。おばあちゃん、おじいちゃん、それからお父さんに会いに行くのだ。お父さんはぼくが六つの時に事故で死んだ。いまではほとんど顔を思い出せない。ここに越してくる前にお母さんはお父さんの私物をほとんど処分した。

「それはそうと、田舎に行く準備しといてね。ちゃんと宿題持っていくのよ」

お母さんはそう言ってテーブルの上にあった煙草を取り出した。セブンスター。お父さんが吸っていたのと同じ煙草だ。

ぼくはシャワーを浴びてから、荷物をまとめることにした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3023c/>

---

CONDOMINIUM

2010年10月28日02時59分発行